

よい語り わるい語り どんなふうに語るか 身振り手振り

図書館で講演会をさせてもらおうと、子どもの前で絵本を読んだり語りをしているサークルの人が、お客としてよく来てくれる。。

で、終了後にこんな質問をされることがある。

「自分も語りを始めたのですが、

どんなふうに語ったらいいのかよくわかりません」。

具体的には「たんと語った方がいいのか、抑揚をつけて語った方がいいのか」

「動かないで語った方がいいのか、身振り手振りをつけた方がいいのか」と

いったことだ。

ぼくの語りは身振り手振りがけっこう入るし、

2人が話すところでは落語のように右を向いたり左を向いたりするので、

「教わってきたことと違う」とびっくりする人もいる。

びっくりされても、ぼくとしては、

「語り口は基本的になんでもいいですよ。

自由にやりたいようにすればいいですよ」と答えるしかない。

もちろん、質問してきた人に教えた人を否定しているようにとられてもこまるので

ことばは選びながらだけれど。

自分が一番自然でやりやすいと感じるスタイルですればいいので、

そのスタイルは場数を踏むとおのずと形になってくる。

でも、「なんでもいいですよ」ではまるで

まじめに答える気がないようにとられかねないので、

改めて書くのだが、これはほんとうに自由でいい。

その語り手が、たんと語ろうが演技たつぷりに語ろうが

聞き手としては(あ、この人はこういうふうに語るタイプなんだ)と

思っただけだからだ。

わかりやすい例をあげると、歌の世界を見渡せば

オペラ歌手のように朗々と歌う人もいれば

身体をゆすりながら歌う人もいる。さらには踊りながら歌う人もいる。

で、ぼくらはそのどれが来ても

自分の歌の世界を持っている人の歌なら、どれもちゃんと楽しめる。

この人はこんなふうに歌う人なんだと思うだけだ。

どの歌い方が正しいということはない。

それはたとえば歌で一番大事なものは声量だというなら

足をふんばって胸を張って歌うのが理にかなっているかもしれないが

声量が歌で一番大事というふうには決まらない。

それはその人のやり方であり、どれが正しいなどということはない。

語りの世界ではときどき、「たんたんと語りましょう」とか

「身振り手振りはあまりつけるものではありません」と

教える講師がいる。

実際、講演会でそう聞かされたこともある。

「身振り手振りは聞き手の空想のじゃまをするからです」とか

「語り手の身振りに気を取られて、かんじんの話が

お留守になってしまうからです」と、どうどうと説明された。

その人の会なので、まっこうから反論したら

全体がめちゃくちゃになってしまうから黙っていたが

これはなんの根拠もない話だ。

一言で言うと、たんたんと語る人の中にも

うまい人とへたな人がいて、

身振り手振りや声色までつけて語る人にも

うまい人とへたな人がいるのであって、

それはスタイルの違いにすぎない。

語りはたんたんと語るのがよくて

身振り手振りがつくと悪いということではない。

音楽の世界で言うと

クラシックが正しくて演歌は下品だときめつけてしまうに近い。

そういう人は自分でかってに音楽の世界をせばめている。

これもクラシックの世界にも演歌の世界にも

うまい人とへたな人がいるというあたりまえのことだ。

自分の世界を持っている人の音楽なら

ぼくらはクラシックだって演歌だって

フォークだってジャズだって、みんなそれなりに楽しめるのだ。

誤解のないようにいうと

「私はたんたんと語るのが好きです」とか

「あまり、振りはつけません」とかいうのは、なんの問題もない。

自分はそういうスタイルだということだから。

でも、「それが正しい、ほかのやり方はおかしい」という人は

語りの世界をかってにきゅうくつにしている。

(そして実際、語りの世界はきゅうくつになっているかもしれない)

それでも、そのやり方を広めたい人は、それは
ひとつの流派なのだと肝に命じてしなければいけない。

「演者が身振り手振りをつけるのは聞き手の想像力をじゃまします」という講師は
なぜ、そんなに禁欲的なのだろうか？

やたら「想像力」とかのことばを乱発するのも好きではないが
そのことばを使うなら、自然な身振り手振りは、
むしろ聞き手の想像を助けて、想像しやすくしているはずだ。

噺家たちはみな、扇子やてぬぐいをつかって
話が聞き手の目の前に浮かぶように工夫している。

それにどうしてなにがなんでも自分で全部想像しなければならないのだろうか？

絵本は、画家が登場人物の絵を描く。

だから、同じ「桃太郎」でも「シンデレラ」でも画家が違えば、全然違うキャラになる。

それはつまり、その画家の想像の世界で遊ばせてもらうということだ。

すぐれた画家は絵がうまいというより、自分の世界を持っている人なのだ。

語りの世界でも、身振り手振りも声の抑揚も、いつとき、すぐれた語り手の
つくりだす世界で遊ばせてもらえばいいのだ。

そこに一生行っているわけではなく、せいぜい10分20分のことだし。

まだまだ、いろいろなことが言える。この続きはまた今度。